

占領下検閲と反戦・原爆詩歌集

栗原貞子

黒い卵

(完全版)

人文書院

反戦・原爆詩歌集
占領下検閲と

黒い卵

栗原貞子

栗原貞子（くりはら・さだこ）

1913年広島に生まれる。

1945年広島で被爆。

1946年3月、『中国文化』〈原子爆弾特集号〉を編集
（82年5月復刻）。

1946年8月、『黒い卵』検閲削除版を自費出版。

著 書：『どきゅめんとヒロシマ24年』（社会新報）、
『ヒロシマの原風景を抱いて』（未来社）、『核・天
皇・被爆者』『核時代に生きる』詩集『ヒロシマ
というとき』（以上三一書房）、『未来はここから始
まる』『核時代の童話』（以上詩集刊行の会）

現住所：広島市安佐南区祇園町長束855-2

黒い卵（完全版）

一九八三年七月十日初版第一刷印刷
一九八三年七月二十日初版第一刷発行

著 者 栗原貞子

発行者 渡辺睦久

発行所 人文書院

京都市下京区仏光寺通高倉西入

電話〇七五・三五一・三三九一

振替京都〇一一〇三

印刷 株式会社文功社
製本 坂井製本所

©1983, Sadako KURIHARA
Printed in JAPAN.

目次

まえがき	3
黒い卵(完全版)	7
序(細田民樹)	9
はしがき(栗原貞子)	12
詩篇	17
短歌篇	69
『黒い卵』と私の戦争・原爆・敗戦体験	113
——解説にかえて	
資料1 CCD新聞雑誌検閲手続について	146
資料2 プレス・コード	148
あとがき	150

まえがき

本書は、一九四〇年から四五五年にかけて、太平洋戦争前から敗戦初期にわたる時期に私がつくった詩と短歌をあつめた詩歌集『黒い卵』の完全版です。

敗戦の翌年、原爆の衝撃がまだつづく広島市の周辺で、平和と民主主義創造に向けた文化運動が始まり、まず『中国文化』（原子爆弾特集号）が創刊されました。そのような動きのなかで私は一九四六年八月に、『黒い卵』を三〇〇〇部出版しました。

当時は、日本の言論界は占領軍の統制の下におかれていました。すべての印刷物は広告にいたるまで検閲を受けねばならず、占領軍にとって不都合な印刷物は発禁、削除、語句の変更を要求されました。『中国文化』創刊号も検閲によって部分的に削除され、自費出版の『黒い卵』も三編の詩と十一首の短歌が削除され、さらに事後検閲を心配した私の自己規制で九首の短歌を削除

し、詩二十九編、短歌二百五十首を収めました。

占領軍に提出した二通の検閲用ゲラ刷りのうち、一通は指定部分を朱で消されて返送されてきたのですが、私は戦後の混乱期にそのゲラ刷りを失ってしまい、『黒い卵』の検閲前の形がどのようなであったか、漠然としか思い出せず、長い間気懸りなままになっていました。

一九六〇年代の末ごろから、占領期についての研究がさかんになり、絶版だった『中国文化』や『黒い卵』も注目されるようになりました。七五年に、私は、占領時代を研究しておられる袖井林二郎氏から、氏がメリーランド大学マッケルデン図書館に収められた膨大な量の検閲押収文書の中に、削除の痕も生々しい『黒い卵』のゲラ刷りを見つけたことをうかがいました。

その後八二年に渡米された広島県出身の詩人で、高群逸枝研究家の堀場清子さんが同図書館で『黒い卵』のコピーをとって下さって、八二年十月、私は三十六年ぶりに『黒い卵』の原型を目にすることができました。

私はそのゲラ刷りを読み、これらの作品を書いた戦争中のころや、自費出版するまでのいきさつを思い出しました。そしてその経過を書き入れ、削除部分を復活した完全版を出版したいと思うようになりました（『中国文化』〈原子爆弾特集号〉は八一年五月に復刻いたしました）。

本詩歌集には詩三十二編、短歌二百七十首が収められています。いま読んでみると、冷や汗の出る思いさえいたします。しかし、戦争の狂気の時代にあつて、たとえ稚拙であつても醒めた目で

戦争を見、反戦のおもいや原爆の惨禍を書きとどめ得たことは、若かった日々の私の歩みの証しであり、戦後につながる根っ子であることを意味しています。

占領軍の検閲の実態の多くがいまもって闇に包まれている現在、本書はその闇を照らし出すかな光を放つのではないかと思います。また、戦時下と占領下の言論・思想の自由の問題を考える素材にもなるのではないかと思います。

堀場さんからケラ刷りを入手した前後は、文部省による教科書検定のあり方をめぐって、国内の怒りや近隣諸国の抗議が高まっていた時期でした。本書を世に問いたいと思う私の気持ちは、そのようななかで一層強まりました。

戦争を知らない世代が国民のなかばをこえるようになり、敗戦、占領も遠くなりました。しかし新たな戦前ともいえる時代を迎えるなかで、私は、日本国民がかつて経験した戦争という暗黒と痛苦の時代、そして敗戦と占領の時代を、今日と連続したものとしてとらえています。一人でも多くの人々、特に若い世代の人たちが、本書から歴史の教訓をくみとっていただければ、私にとってこんなにうれしいことはありません。

一九八三年五月三十日

栗原貞子

占領下検閲と反戦・原爆詩歌集

黒
い
卵
(完全版)

黒い卵

栗原貞子 著



中國文化叢書

※ 私家版『黒い卵』(検閲削除版。1946年8月30日発行)の表紙(原寸大)。

外枠の葡萄のつると真中の花は朱色。

序

今年の五月九日の朝であった。私はその前日、無事でくらししていると自分で書いたハガキをよこした親友の葬式に急ぐために、広島市外古市橋で、郷土からのバスを下りた。すると、下りた途端に、いきなり、岩国方面から呉にむかうB 29大編隊の、激しい空襲に見舞われた。遙か南方に、敵の夥しい編隊と味方の高射砲の弾幕が続き、B 29の大型爆弾の炸裂音は、だん／＼私に近くなってきた、古市の両側の家々が、長い大きな震動で、町を歩いている私の方に、今にも倒れかゝるかと思われた。私は川端で麻をこいでいる女達に、待避待避と叫びながら、高い堤防の下に私もしゃがんだ。これは私にとって、実に始めての経験であった。今にして思えば、昨年の一十月末から、東京のあの猛烈な空襲の開始せられる三ヶ月前に、私は郷土に疎開したわけだったから。――

午前十時頃、古市町東野の亡友の家につき、奥座敷にとおされ、亡友の顔から白布をとって、まだ生きていて私に呼びかけそうなその姿をまぎ／＼と見ている時も、亡友の家は引きつゞく空襲で、ひどい震動が止まなかった。亡友、名は須磨益三、私とは広島一中時代の同窓であり、一中の寄宿舎でも、三年間同室で食を共にした。彼が一高から東大を卒えて、東京で弁護士を開業していた時代、そうして彼の帰郷後の十数年間と、とにかく少年時代からの友達であった。彼はその前日、無事のハガキを私によこしながら、突然狭心症でたおれてしまった。

栗原唯一氏御夫婦とは、須磨のこの葬式の日には、はじめてお眼にかゝったのである。しかも栗原君は、須磨と同じ会社で、同じ性質の仕事にたずさわっていたばかりでなく、あの俗物ぎらいの、人あたりの厳しい須磨と、心を識りあつた仲であつたらしい。

「ばい飲むと、いつでも須磨さんは、いかにも懐しそうに、先生の話をはじめましたよ」と栗原君は幾度も繰り返してそう言った。で、亡友須磨の許した栗原君であるかぎり、私はこの御夫婦と、初対面だったにかゝらず、少しもそんな気がしなかった。果して栗原君夫妻は、政治、社会、思想など多方面に、しっかりと話のできる人であつた。私は——失礼ながら——田舎にも、こんな夫婦がいるのかと、ちよつと驚いたくらいだった。

栗原貞子さんの『黒い卵』の原稿を通読して、まず思われることは、さすがに夫婦で、長い間の思想的苦練を経てきただけに、あのとう／＼たる帝国主義的侵略戦争の間にも、女性ながら、

よく堪え忍んで、じつと自分の感情と思想を操守してきたということであつた。貞子さんは、どちらかというところ、いわゆる苦吟派ではなく、流露調の詩人と思われのだが、見るまゝに、感ずるまゝに、極めて率直簡明にうたいこなしている。女流詩人によくある、持つてまわつたような慇懃な気どりなど微塵もなく、いかにも開放的であり、活動的でしかも民衆的な樂な愛情に溢れている点、今後の新しい時代を約束せられた詩人のように思われる。

私はこの流露詩人が、一層の彫琢と結晶性に精進して、更に輝しい收穫を得る日を楽しみに待つていよう。

昭和二十年十二月

郷土の茅屋にて

細田民樹

はしき

詩と云うもの、詩人と云うものが輕蔑をもって迎えられ、喜劇の対象とせられたのは何故だろうか。

詩が單なる感覺的な美や、ひとりよがりの感傷や暗い憂鬱、病的な神經に映つた非現實的なものの投射をもつて詩の範圍としたからである。もし詩が特異な感情や幻想的な美をもつて足れりとするならば、ヒステリー患者や精神異常者は偉大なる詩人であらねばならない。事実、彼等の描いた絵画や文書は非常に芸術に酷似しているにもかゝらず、非芸術であるのは何故か。

それは思想的な統一がないからである。單なる感傷や非現實的美を描くのだったら、ひつきよう詩は美しき饒舌に過ぎないだろう。人間の生活感情の背後には必ず人生の支柱である思想がある筈だ。

感情は単なる感情ではない。封建的な感情は常に封建的な思想から湧き、自由な掬われない感情は自由な思想の中から生まれる。

私は戦時中も私の思想——自由と愛と平和の社会、非権力社会へのあくがれを純全に歌った。人々が戦争の讚美歌に夢中になっている時、私は片隅で戦いなき世界を熱望した。そして今、戦いは終り世界は新しく結ばれる日が来た。人々は一層強く愛によって結ばなければならない。にもかゝらず、私は常に粗雑な索漠たるものにつきあたっては慟哭している。

細田先生が「無限の愛を歌うべき詩」と云つて下さるのに、私はいつも無限の愛を求めて慟哭している。

しかしそれは無思想から来る悲劇でない以上慟哭しながらも信じて求めよう。新しいヒューマニズムの足音はますます現実へ近づいた。

最後に序文をお書き下さって、さ、やかなこの集をお飾り下さった細田先生、きびしい批判に耐えられないことを自覚しながらも、素裸の私に元氣をつけて下さいました。厚く感謝いたします。

昭和二十一年三月十八日

祇園町にて

栗原貞子

目次

詩 篇	17	日向ぼっこをしながら	36
黒い卵	18	相克	37
戦争に寄せる ―戦場の音の写実放送をきいて―	19	熱いこ	38
秋の星空	23	かいたこ	39
木の葉の小判	24	日々	40
戦争とは何か	26	手紙 ―ビーター！クロボトキンに送る―	41
すべての戦線から ―平和の来る日を想いて―	28	愛	43
再び太陽を	30	新緑	45
新春に想う	33	生ましめんかな ―原子爆弾秘話―	47
粉雪の日に	35	季節はずれ	49
		子供の声	50
		開くべからず	52
		再建	54
		情熱	56
		握手	58
		廃園	60
		夢をゆずる時	62
		疲労	64
		約束	65
		つる草	67